

重要有形民俗文化財

下谷上の舞台（農村歌舞伎舞台）保存修理現場 一般公開

— 屋根修理の状況の公開と舞台機構と奈落の解説 —

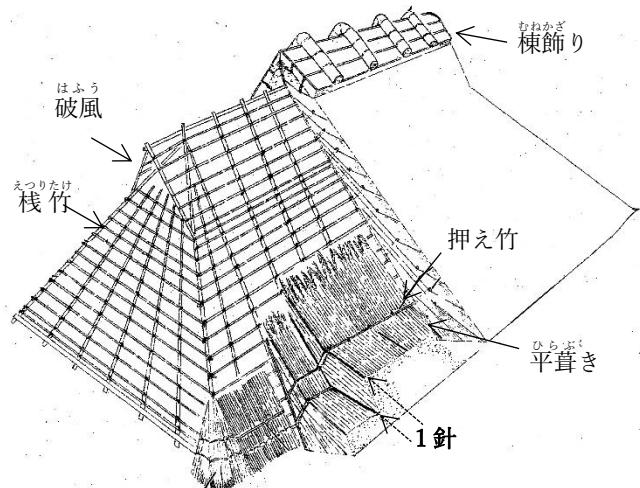
伝統的な茅葺き技術で修理

9月1日から始まった茅葺屋根の修理は、屋根の形を作りながら棟の頂上近くまで葺き上がってきました。これまでの茅葺き作業をたどると以下のようになります。

劣化した茅を屋根から降し、茅葺きの下地・骨組みとなる桟竹（えつりたけ）を取替え、わら縄で結束・固定する修理から始まります。その後、軒先から屋根の頂上に向けてススキを葺き上げていきます。この工程を「平葺き（ひらぶき）」といい、今回は①阿蘇茅（熊本県南阿蘇産ススキ）-②南部茅（岩手県金ヶ崎町産ススキ）-③阿蘇茅-④南部茅の順に異なる品質の茅を交互に葺き、丸竹（押え竹）を置き「針」という道具を使い、縫い針のように下地竹（茅葺きの骨組み）にわら縄をかけ回して結束して固定します。この一連の「平葺き」の工程を「1針（ひとはり）」といい、この舞台の茅葺屋根では約12針程度の作業を繰り返し、屋根の頂上に達し、棟飾り等を取り付けます。



茅葺屋根の修理状況



茅葺き屋根の名称

茅葺き職人からのひとこと

茅葺屋根のてっぺんの部分は、棟（むね）と呼ばれ、茅葺きの最上段部分をすっぽりと覆います。まるで茅で蓋をする様に納めます。茅葺きが雨漏りしないためのもので、防水機能を高めるための工夫がなされています。この納め方にも地域性があり、屋根の形が地域によって異なります。皆さんも茅葺屋根の棟に注目してください。きっとその地方ならではの形に気付くことでしょう。

大掛かりな舞台装置が仕込まれた歌舞伎舞台専用の茅葺建物

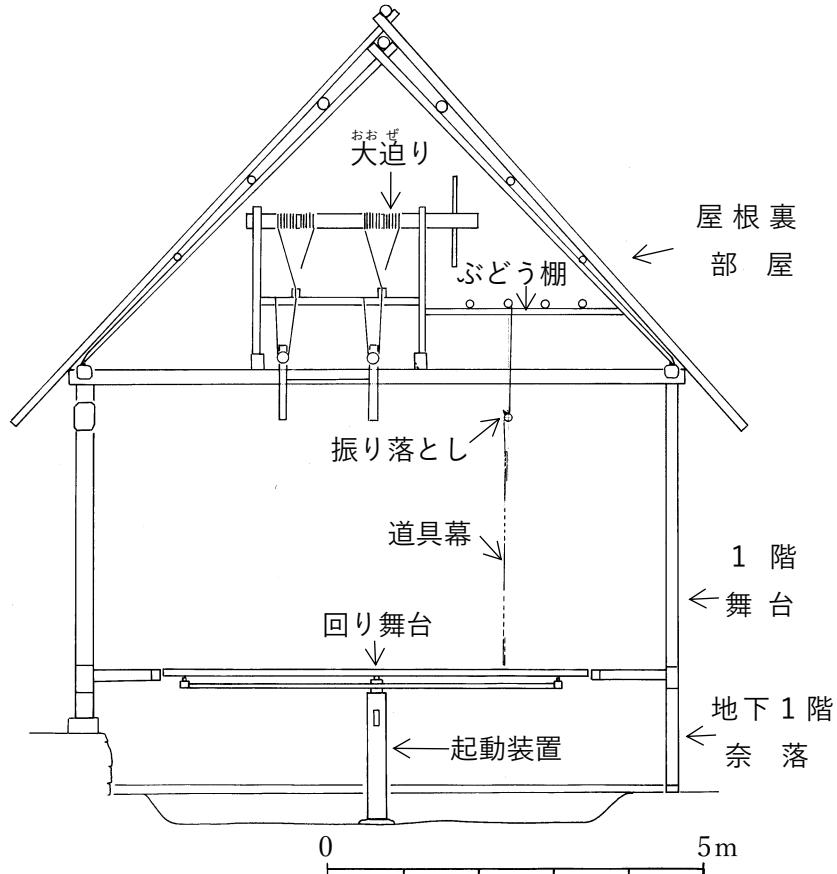
舞台装置や建物の構造、保存状態、継承状態などを記録しています。その一部を紹介します。

三層構造の舞台建物

下谷上の舞台は、観客席（西側）からは平屋建て（1階建て）の茅葺建物に見えますが、大掛かりな舞台装置を仕込むために1階の舞台の他に地下室（「奈落（ならく）」）と屋根裏部屋がある三層構造になっています。

1階は、舞台で役者たちが歌舞伎を演じる場所です。東西約12m、南北約7.8mの舞台に、観客席から見て右側に太夫座（たゆうざ）【物語の説明や、役者のセリフなどを語る人と三味線の演奏者が座る場所。床（ゆか）ともいう】、右手には黒御簾（くろみす）【音楽や効果音を演奏する場所】があり、舞台の床面は直径約5.7mの廻り舞台になっています。

地階1階は奈落と呼ばれ、廻り舞台を起動させる装置があり、役者の樂屋にもなっています。屋根裏には舞台昇降装置である「大迫り（おおぜり）」や背景幕を吊るす「ぶどう棚」があります。



下谷上の舞台の断面図



「裏返し（うらがえし）」装置に付けたそり橋

観客席から見て舞台の左端に花道（はなみち）が付きます。組立式で長さ約9m（6mと3mの二分割）、幅約1.5mの通路で、役者が登場、退場するだけでなく、途中で立ち止まり演技をすることもあります。この花道には、床面が反転する「裏返し」の装置があり、長さ約4.2mの反り橋が現れる仕組みになっています。



大迫り（おおぜり）

【屋根裏部屋】

舞台面上約4.5mに設置された舞台を昇降させる装置です。直径18cmの丸太材に縄を時計廻りと逆時計回りに巻き付け、小舞台の支柱に取り付けた定滑車と動滑車を組み合わせて、長さ7.5m、幅1.2mの舞台を自在に吊り上げ、吊り下げる装置です。



回り舞台

【1階 舞台】

舞台中央の床面が直径約5.7mの廻り舞台になっています。大道具方（裏方役）の6人で回り舞台の縁に開けられた穴に竹製の棒を差し込み押し回します。舞台前面と後面に別々のセットを組んでおいて、回転させることで演目の場面を素早く転換させる装置です。床面の切込みは、奈落から役者が登場したり、井戸のセットを組むことができるようになっています。



回り舞台の起動装置

【地下1階 奈落】

舞台の地下は、奈落と呼ばれています。その中央には一辺21cmの角柱が立っていて上部に三角形の木製クサビが刺さっています。このクサビを打ち込むことで、角柱の中の鉄柱が押し上げられ、回り舞台の床板をわずかに浮かせます。そして、舞台床下（奈落では天井）に設置された16個の回転車に軽く接触させることによって人の力で容易に回すことができる仕組みになっています。

保存会からのひとこと

185年の歴史を持つ舞台建物には、さまざまな舞台機構があります。花道の床が回転して「反り橋」が現れたり、舞台が回転する等の仕掛けがあります。他の地域には無い多彩な舞台装置を持つこの舞台は、国の重要有形民俗文化財に指定されています。私達、保存会はこの舞台を今後も大切に守り、この地域の歴史を積み重ねて來た遺産として未来に伝えていきたいと考えています。

伝統の意匠をそのまま保存・継承

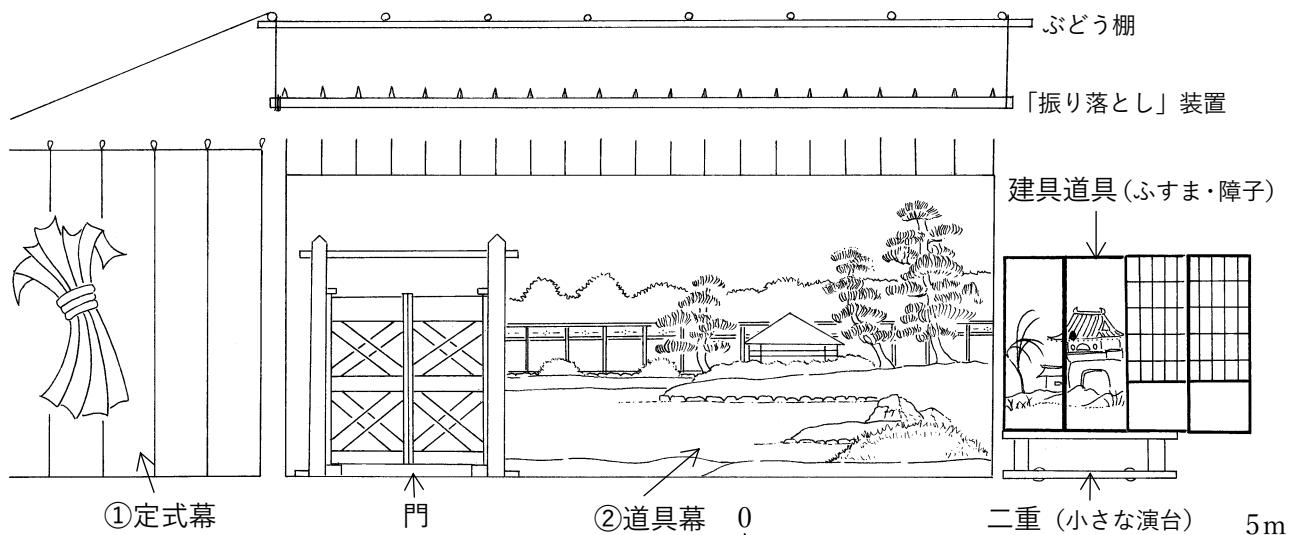
この舞台は、昭和 52 年（1977 年）に火災に遭っていますが翌年には、当時の姿に修復されました。伝統的な意匠や技術をそのままに保存修復し、今日に継承されています。

落ち破風（おちはふう）

屋根を正面から見ると三角屋根になった部分を「破風」とよんでいます。屋根頂上のラインより少し下がった位置にあるのがその特徴です。棟木の上面に切れ込みを入れ、下方に曲げて取付けます。神戸では多くの茅葺建物で見られる意匠です。また、屋根を支える骨組みの垂木は、屋根の頂上で組み合わせた合掌状態になっていますが、一方の垂木先端に方形の穴を刻み、もう一方の凸形に加工した垂木の先端を差し込んで小さな木栓で留めています。これらの部材は、火災で焼け残ったものを元の位置に戻して修復しています。



(上) 落ち破風と (下) 垂木の合掌



大道具の一部

文化財課学芸員からのひとこと

上記の図は、この舞台にある大道具の一部です。①は定式幕（じょうしきまく）といい、舞台前面を覆う引き幕で、黒・緑・柿色の彩色が鮮やかな幕です。②は屋敷や風景を描いた道具幕。屋根裏部屋にある「ぶどう棚」から吊るされますが、吊るした幕を落とし、一瞬にして異なる背景に場面転換させる「振り落とし」という演出を可能にする装置も備えています。その他、玄関や門、ふすまや障子などの建具の道具もあります。これらの道具がいつ作られたかは明らかではありませんが、舞台装置や建物の構造、その保存状態とともに記録し、未来に継承できる資料を作っています。